

大阪大学医学部附属病院で入院している子どもたちへの教育支援

大阪大学医学部附属病院分教室

1 はじめに

大阪大学医学部附属病院分教室は6階の小児医療センター内に教室があり、子どもたちはその教室に登校して学習している。治療や体調の都合で教室に登校するのが難しい場合にはベッドサイドでの授業も行っている。子どもたちが入院に至った病気の種類は、悪性腫瘍（白血病、骨肉腫、神経芽腫、脳腫瘍などの小児がん）、心臓疾患（拡張型心筋症や拘束型心筋症、先天的心不全などによる心臓移植待機）、消化器系（クローン病や潰瘍性大腸炎）等、様々である。入院期間が1週間程度の比較的短期入院の子どももいれば、小児がんや心臓疾患系等の病気で、半年以上の長い入院期間を必要とする子どももいる。

阪大病院分教室の特徴としては、特に悪性腫瘍と心臓移植待機といった長期の入院が多いことである。長期入院の子どもは学習機会の保障だけでなく、長期に入院するにあたり入院へのストレスをいかに軽減できるか、精神的な支援が必要な子どもをどのようにサポートするかが分教室の大きな役割になってくる。

4年前に、医学部看護学科より小児AYA世代を対象とした「入院患者への教育支援、復学支援」について20分ほど話していただきオンライン講座で使用したいとの依頼があった。医学部からは上記のテーマをいただいたが、「入院患者」という言葉が医療従事者側からの言葉であるため「入院している子どもたちへの教育支援」というテーマに代えて話をさせてもらった。

以前は、小児がんで入院している子どもたち対象の話であったが、心臓移植待ちの子どもも同様である。そこで、今回の病気療養児の教育研修会では、小児がんに限らず心臓移植待機を含めた長期入院をしている子どもに対しての教育支援というテーマで発表をした。

2 発表の概要について

発表は大きく分けて、①病院内の学校の種類と院内学級で学習するための手続き、②病気や治療へのストレスへの支援、③精神発達への影響、④入院中の子どもの復学支援、という順番で話した。

3 病院内の学校の種類と院内学級で学習するための手続き

刀根山支援学校はじめ、病弱の支援学校に関わっている先生であれば当たり前のことかもしれないが、一般の小中学校の先生も聞きに来られているため基本的なことから伝えた。まずは、病気療養中であっても子どもには学習する権利があり、それを保証するために特に長期入院の子どもたちには様々な学習保障の機会があるということを紹介した。病院内の学校は入院治療中の子どもが患者から児童生徒に戻れる場であり、学校での顔は病室での顔と違った表情を見せる場合が多いこと、学校は子どもが治療へ前向きな気持ちになるために必要な場所であることをお話しした。

病院の中にある学校には、①地域の公立学校が設置した院内学級、②支援学校の分教室、③学校が設置されていない病院等の訪問教育、の3つの種類の病弱教育を説明した。

また、現行の制度では二重学籍が認められていないため、転籍の手続きが必要であること、高等部が設置されているケースは少ないことを紹介した。

I 実践報告

4 病気や治療への不安・ストレスへの支援

長期入院になった時の不安は多かれ少なかれ誰にでもあるものだが年齢で不安に思う内容は違ってくる。小学校低学年の児童は「今まで遊んでいた友達と遊べなくなった。」と不安に思う児童が多いであろうし、中学2年や3年の生徒では高等学校への受験をどうしようという不安が出てくるものである。また、治療の関係で入院が予定よりも長引き病状に改善が見られないこともある。そんな時、特に年齢の低い子どもの中には「我慢したら病気が治ると聞いていたのに、大人はうそつきだ。」と強いストレスを感じる子どももいる。

我々は、このようなストレスに対して直接的に原因となることを排除することはできないが、学校に来た時やベッドサイドで教員と話をしたときに病気のことを考えなくてもよい時間を作ることを意識し、少なくとも学校がかかわっている時間はストレスを忘れる時間であってほしいと思っている。

5 精神発達への影響

病院の中にある学校の役割として、4つのことを挙げた。

①子どもたちの遊びたい、学びたいという欲求

子どもたちは治療中であっても日々成長しており、体調優先ではあるがせつかくの体調がよい時には友だちと遊んだり、学習できる時には少人数対応の利点を生かし個々に応じた楽しく学べる授業をしたり、ということをめざしている。

②学校は心理的な安定を得る場

一人で治療の不安を抱えるのではなく、友だちや教員と触れ合う中で一緒に支える仲間がいることが治療への前向きな気持ちになり、精神的な支えになると持っている。

③学校は社会性の発達を促す場

本来、学校は多くの友だちや大人との関わり合いの中で社会性は養われるものであり、入院中もその機会は保証されるべきである。多くの子どもたちとのかかわりができるというわけにはいかないが学年を超えた友だちの中でまた違ったかかわりを持ち社会性を育んで欲しいと思っている。

④将来を考える力をつける場

入院中であっても特に中学生は進路の問題は避けて通れない。病院の中の学校であっても情報提供や相談の機会を作り、「退院したらこんなことがしたい。」「将来はこんな人になって頑張りたい。」と考える機会を持つことは重要であると考えている。

6 入院中の子どもの復学支援

特に長期の入院で通院治療が必要な子どもの場合は心身両面からスムーズに学校に戻るよう退院カンファレンスを実施している。カンファレンスには主治医をはじめ看護師やソーシャルワーカーなどの医療関係者、地域校からは担任教員と養護教諭に参加していただいている。今までは阪大病院に来ていただいていたが、ここ数年はオンラインで行うことが多くなり、日程の調整が楽になった。このカンファレンスでは退院時連絡ノートを使用している。あらかじめ必要と思われることを項目化し確認事項を効率よく把握できるように活用している。

7 おわりに

医療関係者の皆様との協力は不可欠だと思っている。互いが連携することによって入院している子どもたちが精神的に治療に前向きになれるよう、協力して大きな支えになることができるようにしたいと思っている。